

9月 若者と学ぶ 部落問題解決への道筋

県水平社創立90年、その歴史と教訓

好評につき第二部上映決定!! “「見たい」の声が続出”



橋のない川

(第二部)

橋のない川 (第二部)『物語』 **今井正監督が描く部落問題不朽の名作!!**

畑中孝二は夢をみた。少年時代の夢であった。川の対岸を杉本まちえが歩いている。彼は夢中でまちえを呼んだ。しかし、まちえにはついに聞こえなかった。二人を遮っている川には橋がなかったのである……。孝二はすでに十八歳になっていた。高等科を優等で卒業したもののすでに数回職を変え、結局故郷の小森で今は靴職人となっていた。被差別部落出身者には就職の自由はなかった。永井藤作の娘お夏は、大阪に身売りしていたが、村の若者清一と世をはかなんでの心中自殺をとげた。妹しげみはお夏の前借の肩代りに、食いぶちを減らすために自ら身売りをのぞんだ。ここにも同和問題の悲劇があった。孝二とまちえは、ある日柏木先生のとりなしで卒業後初めて再会した。まちえは小森で教師となっていた。二人は長い差別の歴史ときびしい現実を怒りが増すのみだった。また、同じ靴職人となっている孝二の同級生たちは、「部落改善運動」を唱える秀賢和尚に結婚差別の現状をぶちまけた。一方、大阪の米問屋に奉公していた兄、誠太郎は主人徳三郎に好意をよせられていたが、娘あさ子が彼との結婚を切望していることを知るや、その態度は急変し、ついに誠太郎にひまをだし、あさ子の髪を切り、二人の仲をひきさいてしまった。大正十一年、秀賢の提唱する「部落改善運動」は融和団体、平等会へ合流していった。だが、その創立大会に参加していた被差別部落の多くの人々は平等会の本質を見破っていた。「部落民は自らの手で差別と貧困を追放せよ」とのビラがまかれた時、会場は怒号と弥次馬で大きく紛糾した。秀昭たちを捕えようとした巡査も群衆に阻止された。孝二と秀昭は抱き合って喜び合った。「水平社万才」の声が会場を圧した。

<第10回学習会> 9月6日(土)

※午前9時30分～12時

※岡山県民主会館 2F 会議室

※どなたでもご参加下さい

※参加費は無料です

岡山県地域人権運動連絡協議会

700-0054 岡山市北区下伊福西町1-53

TEL086-253-2611 FAX253-6722